

第八十四号

## 家元を生きる

メルマガnoichi第八十四号、今月のテーマは「家元を生きる」。今月のメルマガは現在好評発売中のDVDを特集します。中島靖子の人と芸を広く伝えていける、素晴らしい映像作品です！

今月のメルマガでご案内するDVD「箏とともに家元を生きるー中島靖子 人と音楽ー」は、微力ながら、弊社N・Y・Cも制作に協力させて頂き、製作過程にずっと携わらせて頂きました。

このDVDは、人間・中島靖子の魅力を余すことなく収録した秀逸の映像作品となっています。本編は二枚組から成っており、一枚目は中島靖子家元へのロング・インタビューを軸として、正派二代目家元を宿命付けられた中島靖子の生涯を振り返ります。また、世間に知られる機会の少ない「家元の仕事」を四年にわたり密着取材した、内容の濃いドキュメンタリー形式となっています。二枚目は、平成二十七年に中島靖子の卒寿を記念し国立劇場で催された演奏会を全編収録しています。尚、この演奏会は全曲中島靖子作品によって構成されたプログラムという、卒寿のお祝いに相応しい内容となり、お客様からも大変好評を得た会です。

最後に、個人的な意見になりますが、正派家元に欠かせない資質が二つあると思っています。一つは「芸の継承」で、もう一つが一派の象徴になりうる「人望」だと思います。このDVDは、人間・中島靖子に備わるその両面を映し出すことに成功しています。これから箏曲の道を志す新世代の人たちにも、このDVDを見て頂くことで、未来永久、正派二代目家元の人物像が十分に分かってもらえることが、何よりも意味のあることであり、このDVDの価値を示すことであると私は考えています。最後になりましたが、日本伝統文化振興財団理事長・藤本草様をはじめ、スタッフの方々、DVDの製作にご協力頂いた諸先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

## DVD「箏とともに家元を生きる―中島靖子人と音楽―」制作ノート、その2

公益財団法人日本伝統文化振興財団

理事長 藤本 草

思いがけずメールマガジンへの寄稿の機会を奥田雅楽之一さんから頂きましてから、足かけ四年間にわたった靖子先生のDVD制作の日々を振り返り、折々の撮影シーン、様々な出来事やその時々のお思いが次々と甦りました。浮かんだ記憶はやがて、靖子先生とお目にかかるそもそものきっかけとなった、LPレコード時代の「准師範試験課題曲集」録音を行ったビクタースタジオでの思い出の数々へと遡り、さらには、初代家元雅楽之都先生に始まり、靖子先生から一子先生、唯是雅枝先生、そして奥田雅楽之一さんへと、ほぼ九〇年間に及ぶ正派邦楽会とビクターの長く深いご縁を改めて思い起こすこととなり、記憶の旅は留まるどころがなくなってしまうました。

その結果、本当に面目ないことに、お約束致しました原稿締切日をだいぶ過ぎた日まで、靖子先生のご演奏や折々のお言葉、様々な物事についてのご判断や考え方などについて



て、思いが止めどなく巡り、どうしても言葉にまとまらずにありました。本稿を書き初める前には、DVD撮影時の「秘話」のようなエピソードをメールマガジン誌上で言葉にしてみようと考えていたのですが、長い年月の積み重ねを踏まえて、靖子先生のお言葉とご演奏を「映像記録」として残さなければならぬとの信念を抱くに至り、このDVD作品を制作させて頂いたことについて、この機に書かせて頂くことに致しました。

靖子先生は私にとりまして、そして多くの方々にとって本当に特別な存在なのです。

過ぎ去った日々、たくさんの記憶が呼び起こされる中、突然ある日の光景が思い出されました。それは市ヶ谷の正派邦楽会館で、五十代の靖子先生に二十代の私がお詫びを申し上げている遠い日の記憶です。

ビクターが「准師範試験課題曲集」LPレコードの発売を開始したのは昭和四十四年でした。その後、私が先輩ディレクターから制作担当を引き継いだのが昭和五十三年で、その翌年、靖子先生が二代家元を継承されました。たぶんその前後の頃、もう四〇年近く前のこととなります。断片的な映像が目につかびます。その時も、何か靖子先生にしっかりとお約束したはずのことが出来ず、会館のロビーで靖子先生にお詫びを申し上げているのです。何が原因だったのか、また、靖子先生が何と仰って下さったのか、残念ながら肝心な部分はどうしても思い出せません。

けれども、いちばん初めにお会いしたその頃から、靖子先生は私にとつてすでに特別な存在でした。それは、「考えなくてはならない」とお決めになった事柄についての靖子先生のお考えの尋常でない「深さ」、そして「思わなくてはならない」と感じておられる事柄についての靖子先生の特段の「強いお気持ち」で、その「深さ」と「強さ」が、駆け出しの私にもすぐ感じられたからにほかなりません。

DVDに収録された合計二〇日間を超える撮影の中で、



是非ご覧頂きたいシーンのひとつに、正派邦楽会館三階ホールで二年にわたって二度収録した、靖子先生への「ロングインタビュー」があります。私自身が聞き手となっていたインタビューの中で、それまでずっと私を感じていた靖子先生のお考えの深さ」と「思いの強さ」の根源について、靖子先生が語って下さいました。それはしかし

「このようなことを私は大切にしている・・・」と結論めいてお話しにいられたではありません。お筆に初めて出会った日、初舞台のこと、父雅楽之都先生からの指導の様子、宮城道雄先生のこと、恩師としてお名前を挙げられた宮城喜代子先生、平井康三郎先生への感謝の念、アメリカ留学中の学校での演奏、そして正派の多くの方々から本当に嬉しいと伺ってきた靖子先生ご自身の指導についてなど、「音楽」について語られた本当にすべてのことから、靖子先生が音楽をどれだけ深く考え、音楽に真正面から向き合ってきたことが、改めて深く感じられました。

また、雅楽之都先生のお人柄、門人に囲まれた「人だらけ」の中の母上の日々の生活、二代家元になられてからの数々のエピソード、そして最愛の唯是震一先生との出会い、一子先生、雅枝先生への接し方など、「人」についてお話になられたことのすべてから、正派邦楽会とそこに集う会員の方々のことを、靖子先生がどれほど大切に思っておられるかを、改めて気づかされることとなりました。

「考えなくてはならない事柄」とは、靖子先生にとって一にも

二にも三にも「音楽」なのです。そして、「思わなくてはならない事柄」は「人」に関わることで、中でも別格に大切に思っておられることは、リーダーとしての正派邦楽会の皆様への強いお気持ちです。

こうした経緯から、靖子先生のDVDは「中島靖子」と音楽」と言う仮タイトルで企画がスタートしました。撮影が終了し、DVDジャケット表紙や解説書の編集が次第に進む中、収録内容がより分かり易く、靖子先生の「人となり」と「音楽家としての生き方」がより明確に伝えられるDVDタイトルを模索しておりましたところ、本DVDの直接の制作契機を齎して下さった雅楽之一さんの発案による「箏とともに」が家元を生きる」をDVDの正題とすることとなりました。当初からの私案「中島靖子 人と音楽」は、副題として添えられることになりました。「箏とともに家元を生きる」のタイトルには、撮影が開始された年の一月に唯是震一先生が旅立たれ、すっかりお力を落としておられた靖子先生を励ましたいという雅楽之一さんの思いが込められていたのだと思います。

本メールマガジンの読者には、正派邦楽会の会員でない方々も多くおられると思いますが、このDVDをご覧になった正派邦楽会の会員の皆さんは、「私は正派の会員で本当に良かった」というお気持ちをきこって持つて頂けるのではないかと思います。

伝統音楽は今、大変難しい時代を迎えています。「閉鎖的なピラミッド型家元制度」で、今や聞く人もする人も少ない邦楽は「なくなっても良いのでは」という暴論も目にします。けれども、音楽の本質に「和洋」の違いは全く関係ありません。

正派邦楽会は、初代家元雅楽之都先生が掲げられた「常に研鑽を惜しまず、芸と人格をみがく」精神を旨に、伝統の継承における家元制の長



Illustration: morimoe

所を生かしながら、自由に開かれた組織として今日まで活動を続け、現代の日本最大の邦楽団体として箏の伝統と歴史を未来へと継承する大きな役割を果たしています。

DVD『箏とともに家元を生きる』中島靖子 人と音楽』は、父雅楽之都先生から学び受け継いだ精神、恩師宮城道雄、宮城喜代子、平井康三郎各先生への深い感謝、次世代を担う人々への思いなど、靖子先生がロングインタビューで語られた珠玉の言葉の数々と、常にひたむきに取り組まれている演奏、日々果たされている家元としての活動を映像記録したドキュメンタリーです。家元としての多忙な日々、卒寿を迎えられ第一線で活躍する現役演奏家としておそらく最

高齢のひとりでありながら、靖子先生は多彩な音楽活動を今日も続けておられます。この映像記録を通じて、まさしく稀有な存在である靖子先生の実像と真価を、広く皆様にご覧頂ければありがたいと存じます。

終わりに、締切日が大変過ぎてメールマガジン発行にご迷惑をおかけ致しました奥田雅楽之一さん、ご担当の新見さんに深くお詫び申し上げます。



二〇一八年五月二十六日

◎あとかぎ◎

何年か前にレコードが聴きたくなった。まだ十代だった娘に、「レコードプレーヤーを買ったと言ったら「蓄音機?」と返されてしまった。五十代でも蓄音機の音を知らない人は多いはずだが、彼女達にとってはLPレコードもSPレコードも昭和の物。たいして違いはないのだろう。

その昭和のころ、レコードは子供にとっては高価なものだった。ためたお年玉で買う場合でも、とにかく試聴を重ねて、絶対に失敗のないように万全を尽くした。当時はまだ試聴コーナーはなかった。レコード店の店員に頼み込んで、かけてもらうしかない。あまりしつこいと嫌われてしまうから回数も限られていた。レコードが買えないと、普段はどうしていたのか。もちろんカセットテープだ。ラジオから録音したり(エアチェックと言っていた)、テレビの前に陣取って、音声だけを録音していた。そんな時代もすっかり変わり、CD、ミニディスク、MP3、ついにはネット配信と進歩して行ったが、音は逆に貧しくなってしまう。便利にはなったが音楽を聴く喜びは減ってしまったような気がする。おじさん達がまたレコードを聴くようになったのは必然なのだろう。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

